

05-01

「看護倫理3」研修受講後の評価

北見赤十字病院 看護部CS委員会

高見 淳子、佐々木弘子

【結言】当院の看護倫理研修は、キャリア開発ラダーのレベル別研修になっており、ラダー申請には受講が必修である。看護倫理3は、倫理的問題を分析する方法を知ることを中心にトンソン&トンソンの「看護倫理のための意思決定10のステップ」の講義を受け自己事例を分析し、グループワークを行っている。今回は看護倫理3の研修評価を行う。

【方法】平成20年度～22年度に看護倫理3を受講した27名の受講直後のアンケートを分析した。アンケートは、「受講内容について」、「今後の看護への影響」等を4段階で回答する。また、その他に自由記載で意見を聞いている。

【結果】「受講内容について」は、良いと26名が回答していた。受講生は、看護倫理が難しいという先入観があったが、ステップをふんで考えていくと自己の倫理問題の解決の糸口が見つかっていた。少数者のグループワークによって有効な意見交換ができ、別の視点で物事を考えることができたと感じていた。「今後の看護への影響」については、影響があると思うと26名が回答していた。さまざまな考え方に触れて、自己の視野が広まったと感じていた。ステップモデルを使いこなすまでには時間を要するが、日常の忙しさから離れて自己の看護の振り返りができたことと実感していた。考えることが大切で楽しく思った受講生やまた参加したいと希望する受講生もいた。

【考察】研修は概ね好評であった。しかし、一人で倫理問題を考えるには限界を感じる受講生がほとんどであった。気軽に倫理的ジレンマを語る場が求められている。日々のカンファレンスの時間を有効に活用することが望まれるが、ステップをふんで考えられるように各部署にファシリテーターの役割が出来る人材の育成が今後の課題である。

【結論】看護倫理3の受講生は、ステップをふんで分析することで倫理的問題が解決できることを学んでいた。

05-03

エンゼルケアの充実に向けたエンゼルケア勉強会の成果

前橋赤十字病院 看護部

湯澤 美咲、新井祐美子、狩野裕実代、沼尻 美晴、日向 節子、六本木京子

【はじめに】大多数の看護師が、家族参加のエンゼルケアを肯定的に捉えているが、実際には行えていない現状があった。当院のエンゼルケアの教育体制は不十分であることから、エンゼルケアの概念、基礎的知識及び手技、患者・家族への声掛けの具体例などについて病棟独自の勉強会を開催した。

【目的】エンゼルケアの充実に向けたエンゼルケア勉強会の成果を明らかにし、さらなるケアの充実に向けた今後の研究課題を考察する。

【方法】まずアンケートを行い、不安に思っていることや、得たい知識を明らかにし、それらを充足出来るような勉強会を開催した。その後比較検討のために再度アンケート調査を行った。

【結果、考察】エンゼルケアの目的は、「家族が患者の死を受け入れられるように関わる援助」「家族の死の受け入れの準備」というグリーフケアの側面と「旅立ちの為の身支度」「感染源の飛沫防止」という死後整容の側面という二つの意味があると理解している人がほとんどであった。家族へのケア参加の声掛けは全員が実施していた。しかし勉強会に参加した人は自己のケアに対する満足度が下がっている。これは、勉強会を通してエンゼルケアの目的を果たすため、自己の行動を、「処置」ではなく「ケア」と捉えられ、自己の理想的ケアに近づけようと一人一人の心の動きが起こっていると考えられる。

【今後の課題】患者と家族のニーズに柔軟に対応出来る姿勢と、それに気付く感性を磨くため、私達は一步ずつ確実に自己研鑽に努めていく必要がある。

05-02

手術室における緊急時シミュレーションを実施しての評価

前橋赤十字病院 中央手術室

小池加奈子、上林 伸宜、岩崎 裕子、江戸谷真紀、三枝 典子

A病院手術室では1991年より年1回、緊急時シミュレーション（以下シミュレーションとする）を実施している。目的は、1. 患者急変時に、基礎的知識や経験に基づいた的確な判断力・行動力を発揮する。2. 急変時アルゴリズムやマニュアルが指針となり、急変時の対応方法を学び、急変時に対する意識付けを図る。3. 科別リーダー単位システムを理解し、迅速なチームプレイを展開する。4. 自己啓発の動機づけを図る。方法は、手術室のスタッフ指導係が企画し、手術室経験の浅いスタッフを中心に参加者の役割を考え、経験のあるスタッフが評価・講評している。症例は実際に起こった急変を想定して考え、参加者には状況設定と役割のみ当日に伝達し、模擬設定はスタッフ指導係以外には公表せず、参加者がより現実の実践を意識できるように作成している。実践状況をビデオ撮影し、その後全員でビデオ鑑賞し、振り返りをしている。今回はシミュレーション実施後に、参加者と評価者・見学者にそれぞれアンケート調査を行った。その結果、今まで行っていたシミュレーションを評価することが出来たので報告する。

【目的】手術室におけるシミュレーションを実施して、企画内容・方法の評価と目的・目標の達成度を評価し、シミュレーションの方法を再検討する。

【方法】手術室看護師36名中、今年度のシミュレーションに参加した看護師9名、評価者・見学者13名にシミュレーションに対する27項目のアンケート調査を実施する。

【結果・考察】年に1回のシミュレーションであるが、目的・目標を達成した項目も多かった。しかし、評価が低い項目もあった為、シミュレーションの課題も明らかにする事ができた。今後はこの結果を踏まえ、より効果的なシミュレーションの企画を検討していきたい。

05-04

ICTリンクナースによる手指衛生遵守への取り組みとその効果

高槻赤十字病院 看護部

松下めぐみ、木野村恵子

【目的】手指衛生は感染対策の基本であり、遵守率向上には教育や啓蒙活動が必要である。手指衛生行動には知識、意識など複数の要因がからみ、幾つかの戦略の組み合わせが行動の促進に繋がると言われている。当院ICTでは、手指衛生遵守率向上に向け手洗いトレーニングやポスターによる啓蒙活動や研修会を実施している。2007年からは、看護ケア場面における手指衛生の遵守率向上のため、ICTリンクナースが中心となり、キャンペーン活動に取り組んできた。手指衛生の遵守率の測定には、意識調査や行動調査の結果と、速乾性手指消毒剤の使用量を用い評価を行った。手指消毒剤の適正な使用量は、病棟の特性や重症度などに大きく左右され、具体的な指標はないが、使用量が手指衛生の遵守率を反映していると言われている。今回、2007年から取り組んできたキャンペーン活動をまとめ、その効果について検討したので報告する。

【方法】質問紙による意識調査と参加観察法と質問紙による行動調査を行った。1患者当たりの1日手指消毒剤使用量を毎月の速乾性手指消毒剤の払い出し量から算出し、キャンペーン活動の効果について検討した。意識調査や行動調査とキャンペーン活動前後での手指消毒剤使用量の増加率を算出した。

【成績】意識調査と行動調査の前後で手指消毒剤の使用量は増加した。キャンペーン活動前後で手指消毒剤の使用量は増加したが、統計学上の有意差は認められなかった。(P > 0.10)

【結論】意識調査や行動調査はホーン効果を得られ、遵守率向上に繋がる。視覚教材を用いたキャンペーン活動は効果がある。手指衛生の遵守率向上には戦略の組み合わせと継続が必要である。